雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ

Midrist Vol. 8

農園八兵衛・塩原　悠一郎さん典子さん（新潟県五泉市）

新潟県の田園地帯。まだまだ暑さの残る8月下旬。私たち取材班は、新潟市の南東に位置する五泉市のほ場に向かった。農園八兵衛の塩原悠一郎さんと典子さんは、風に揺れる草が広がり虫たちの鳴き声が賑やかに響いているほ場で、私たちを迎えてくれた。

そんな畑の中で、典子さんは「虫が多いから」と虫よけスプレーを貸してくださった。気遣いに感謝しつつ取材を進めたが、両腕にはそれぞれ三か所ずつ蚊に刺された痕が残った。痒みに耐えながらも、自然の中での時間を噛みしめるように、いま、この記事の執筆に励んでいる――。

ふかふかとした土の上に立つ塩原さんは、日焼けした肌に汗を光らせながら、静かに畑を見つめていた。その姿は、自然と共に生きる人そのもの。派手さはないが、どこか柔らかいのに力強い、そんな佇まいが印象的だ。塩原さんの畑は、見慣れた慣行栽培の畑とは少し違う。草が生い茂り、虫の声が響く。除草剤で整えられた畑とは対照的に、ここには「自然のまま」がある。だが、決して放置されているわけではない。草は野菜の生育に支障がない範囲で残され、虫たちが野菜だけに集中しないように、草の多様性が保たれている。

塩原さんにとって自然栽培とは、ただ農薬を使わないというだけではなく、自然との調和を目指す営みなのだ。

現在、塩原さんは約1.5ヘクタールの畑で、さつまいもを中心に里芋や丸オクラ、トマトなどを育てている。農薬や肥料を使わず、草や虫と共存する「自然栽培」を実践中だ。収穫した野菜は、地元の直売所や数多くの自然派食品を取り扱うお店、さらにはネット販売を通じて全国の消費者に届けられている。やきいも八兵衛の屋号で焼き芋屋としても知られており、地域のスーパーの店先で販売するなど、地元とのつながりも大切にしてきた。

焼き芋用のさつまいもは、特に人気が高い。ねっとり系の甘みが特徴で、焼き芋屋としての出店先も増えている。ネット販売では、塩原さんのさつまいもが「甘くて美味しい」と評判になり、九州から注文が来ることも。ネット販売も好調で、自然栽培の価値を認める多くの人との輪をつなげてきている様子が伺える。

自然栽培を始めたのは2013年。悠一郎さんはもともと、東京の大学で歴史学を学び、化学メーカーの営業マンとして働いていた。会社勤めの大変さを経験する中で、東日本大震災の大混乱を目の当たりにしたことがきっかけとなり「本当に自分がやりたいことは何か」と自問し、地元に戻り農業を始める決意をした。最初は「無農薬なら売れるかも」という軽い気持ちだったが、土の変化や虫の多様性、そして畑で働く心地よさに触れるうちに、自然栽培の奥深さに魅了されていった。

とはいえ、その道のりは平坦ではなかった。草が生い茂る畑を見て、周囲の農家から「貸した農地を返せ」と言われたこともあった。豊富な水資源に恵まれる五泉市だが、塩原さんのほ場の周囲には用水が少ない。特に今年は、六から七月に渇水の影響を受けた。井戸からくみ上げた水をトラックに積み、ほ場まで何度も運んで水やりをした。さつまいもを優先した結果、トマトは全滅した。それでも塩原さんは草の持つ日陰効果や水分保持力に着目し、草刈りのタイミングを工夫するなど、自然の力を最大限に活かす方法を模索してきた。

新潟県農業大学校での学びも、塩原さんの好機となった。慣行栽培の基本を学びながらも、自らの課題として自然栽培を選び、実証畑での実験を重ねた。先生方の理解と支援のもと、肥料の違いによる生育の変化を観察し、実践的な知識を身につけた。その経験は、現在の畑づくりに大きく活かされている。

「心地のいい場所をつくりたい」。塩原さんの想いは、そんなシンプルな言葉に集約される。それは、農業の効率や収益を超えた、心の豊かさを追求する姿勢だ。畑は単なる生産の場ではなく、人と自然が調和する空間。訪れる人がほっとするような、そんな場所を目指している。

その想いは、地域にも広がっている。多様性を大切にし、消費者にも地球環境にも負担のない農業を進める協同組合「人田畑」では、組合員による情報交換や販売支援、ワークショップなどを通じて、地域の仲間とのつながりを深化させている。しめ縄づくりやさつまいも掘り体験の開催など、農業と文化を融合させた活動も展開しており、消費者との距離を縮める工夫が随所に見られる。人田畑のメンバーは、年齢も背景も様々だが顔を合わせた時には情報交換や悩みの共有が自然と始まる。典子さんは「たわいない話をしながらでも、少し前に進んでいけるみたいな気持ちになれる」と話す。典子さんは、有機栽培の藁を使用したしめ縄や米俵を作成する「わら部」を立ち上げ、文化の継承への取組や、月一回の協同組合の直売所の立上げ、運営など、地域で自然栽培の輪を広げている。

塩原さんの取組は、単なる農業ではない。草や虫を敵とせず、排除しない。自然のままに育てるという姿勢は、環境への配慮でもあり、人間の暮らし方への問いかけでもある。畑に生える草は、日陰をつくり、土の乾燥を防ぎ、虫たちの居場所にもなる。そうした自然の営みを尊重することで、野菜はゆっくりと、しかし力強く育っていく。

かつて懐疑的だった実家のご両親も自然栽培の価値を認めるようになり、今ではほ場の一部で自然栽培を始めた。地域の農家との関係も、少しずつ変化している。かつては「草だらけの畑なんて」と言われたが、今では「草があってもいいんだ」と受け入れられる空気が生まれている。

そして塩原さんが見据えるのは、「持続可能な農業」だ。耕作放棄地の再生にも関心を示しており、自らの取組をイギリスで始まった自然保護活動である「ナショナルトラスト」になぞらえて未来を見つめている。誰かに頼まれたわけではない。ただ、荒れていく土地を見過ごせない。個人農家としてできることには限界が

あるが、周囲の仲間たちと手を広げ、農地の保全に取り組んでいきたいと話す。

けれど、塩原さんの関心は、単なる作物の生産にとどまらない。もともと歴史や哲学、文化人類学に興味があり、本を読むことが好きだった。畑で過ごす時間の中で、自分の感じたことや考えたことが、学んできたことと自然につながっていく感覚があるという。

「畑での体験と、学問とのつながりを探求していきたいんです」と塩原さんは語る。訪れる人にその思いを伝えたり、文章にして発信したりすることで、自分の関心を形にしていきたいという。農業と並行して、文化的な活動をしていきたい――それが塩原さんの今後の展望だ。

環境を守らなければ、という強い使命感があるわけではない。ただ、自分が気持ちよくいられることが、結果として自然や環境にとっても良い方向につながっていく。そんな「こうあるべき」という枠にとらわれない、自然体の姿勢が塩原さんの魅力である。

自然とともに生きること。それは、効率や便利さを手放すことではなく、心地よさと調和を選ぶこと。塩原さんの畑には、そんな生き方のヒントが、そっと息づいている。

Writer: 上田

DATA【農園八兵衛】

場主：塩原 悠一郎・典子

農法：栽培期間中の化学農薬・化学肥料不使用

品目：さつまいも（紅はるか）、里芋、丸オクラ、トマト　等

農園八兵衛
のうえんはちべえ

Instagram：
@nouen.hachibe

NOUEN.HACHIBE

オクラの葉